

重点目標「元気に挨拶をする子どもの育成」の意味

昨年度は、重点目標を「進んで挨拶をする子どもの育成」として、教育活動に取り組んだ。その成果として、気持ちのよい挨拶ができる子どもが増えるとともに、学年に応じた基礎的な学力向上を図ることができた。

しかし、課題として、思考力・判断力・表現力等の育成に未だ不十分な面が見られ、子どもたち同士がコミュニケーションの大切さを理解しながら、主体性をもってお互いで高め合うような学習をつくる必要がある。

この課題を解決し学校の教育目標を達成するために、本年度も、人との関わりの第一歩となる「挨拶」に焦点を当てて、課題解決に向けて教育活動を推進していく。

そのために、重点目標を「元気に挨拶をする子どもの育成」とする。

「元気」は、古くは「減気」と書き、病気の勢いが衰えて快方に向かうことを表した。近世には「験気」と書き、治療などの効果が現れて気分がよくなることの意味となった。現在では、活力の盛んなさまを意味するようになり、「元気」と書くようになった。元気とは、単に行動が活発であったり声が大きかったりすることではなく、活動の源となる力が十分に内包されている状態にあることととらえる。

「挨拶」とは、中世に日本に入ってきた漢語であり、元来禅宗において僧が問答を繰り返す意味をもつ言葉である。現在では、他人に対して尊敬や親愛の気持ちを表す動作、言葉、文面などを意味する。「尊敬や親愛の気持ちを表す」という点において、学校の教育目標の達成や教育課題の解決に向けて重要な意味をもつとともに、挨拶はコミュニケーションの大切な第一歩であり、学力向上や人間関係づくりの基盤となるものだと考える。

以上をもとに、「元気に挨拶をする子ども」の姿を、下のようにイメージする。

「元気に挨拶する子ども」の姿のイメージ

- 周りの人への穏やかで優しい表情、態度
- 自信をもち落ち着きのある明瞭な声
- 背筋を伸ばして相手に正対する姿勢

このような元気に挨拶する子どもが育っていけば、良好で円満な人間関係がつけられるとともに、落ち着きのある授業が展開され、お互いを尊重した意見交換がなされながら、一人一人が満足感や充実感を味わう学校生活をつくり上げることができると考える。

そして、元気に挨拶をする子どもの育ちを見とる視点を以下のようにする。

【元気に挨拶する子どもの育ちを見とる視点】

- 知・・・学習に対する意欲や満足感・充実感をもって、授業前後の挨拶をしている。
- 徳・・・相手の立場や状況を考え、思いやりの心をもって、日常の挨拶をしている。
- 体・・・時と場合に応じた態度や姿勢、発声の仕方で、挨拶をしている。

このように、元気な挨拶をする子どもの育成を重点目標と設定し、知・徳・体の育ちを見とる視点から指導を進めることで、本校の課題を解決し、学校教育目標の達成に迫ることができると考える。